
ガラスの靴

knight bug

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの靴

【Nコード】

N7238Z

【作者名】

knight bug

【あらすじ】

孤児だった少女が、日本人夫婦の元に引き取られアイススケートーとして、世界に羽ばたいて行こうとするお話です。
シリアスなお話です。

ガラスの靴

ガラスの靴を落としたシンデレラは、その後幸せになったけど、もしあの時ガラスの靴を落としてなかったらどうなっていたのかしら。
..。

皺皺の手で自分のトロフィーを摩る老女の顔は、微笑んでいた。そして、彼女の隣に立つ老人も彼女と同じように微笑む。

「お互いに沢山悩み、傷ついたけど、あなたといっしょになれて本当に良かったですよ」

老女はそう言うと言を細め、手に持っていたトロフィーを箱の中に仕舞い込んだ。彼女の栄光を飾ったトロフィーは、この屋敷には飾られた事が一度も無い。

それは、彼女が自ら望んだ事だったからだ。

未だに疼く腰の傷、「これさえなければもっと上まで行けたのに」
..

彼女の目から涙が零れ落ちる。

彼女の夫は、床に落ちた膝掛けを取ると、彼女の膝の上に置く。

「そろそろ冷えるから、暖炉の前にも行こうか」

優しく声をかけた。

「そうですね。今夜はとても冷えて来そうだね。あの時の傷が、疼いて来るもの」

老女がそう言うと、腰を摩っている。

2人は、寄り添う様に暖炉の火を見ていると、隣の部屋から大きな歓声が聞こえて来た。

「もう、始まっちゃったんですね」

「そうだな。早いな……。さあ、観に行こうか。私達の孫の演技でも……」

そう答えると2人はそろそろと立ち上がるとテレビが置いてあるとなりの部屋へと向った。

其処には、今度のヨーロッパ大会で優勝するために、頑張っている2人の孫と、彼らの友人の孫の演技が始まった。

ボレロの曲に合わせて、エッジを滑らせる少女を背の高い男性が愛おしそうに両手を広げる。

終盤までダブルアキセルやルッツも何も無く、リフトとステップそしてスピンだけの2人の演技に目を丸くした老女。

「あら、珍しい……。今回のプログラムには、ダブルアキセルもルッツも入ってないのね」

「あら、おばあさま」

其処に居るのは、今映像に出ている2人だった。

「だけど、全体的に丁寧で綺麗だわ。曲もよく考えて構成したのね。私が採点にしても、満点を出すわよ」

「ありがとうございます。いつもはパワー演技だけでイケイケゴーゴーだったんですけど、それだけじゃダメだって気が付いたんです

よ。そんな単調な演技は、いつか観客も飽きるから、自分達にしか表現出来ない物を作ろうって決めたんですよ」

孫娘のサクラの肩を抱きよせると頬に唇を押し付けた男は、そう言う目配せをした。

最後のスピンの終わった所で画像の中の2人は、目を合わせるとお辞儀をした。普通なら、その後すぐにリンクを去らなければならぬいが、画面の中の男性は彼女に対して跪くと手を差し伸べた。

相手の女性は、真っ赤になりながらもその手を受け取ると、会場から拍手喝采が上がっていた。

「あらあら。随分、派手なプロポーズね。でも、素敵よロナルド」

「ありがとうございます。美月おばあさん。サクラさんが僕のプロポーズを受けてくれたんです」

「あら。良かったわね。流石はリカルドの孫ね。桔梗もそう言えば、オクタビオの孫にプロポーズされたとか言ってたわね……。隼人はどうするのかしら……。ちゃんとプロポーズ出来たのかしらね？」

年頃の三人の孫達を持つと要らぬ世話を焼きたがる老女は、フフフと笑った。

そんな老女を包み込む様に、周りの者達も笑い出す。

「みんな、君と血縁を結びたがっていたからな……。流石に自分の娘がデューオの息子と結婚したいと言って来た時には、驚いたけど……」

老人が、茶目つ氣たつぷりに皮肉を言うと、周りはどっと笑い始めた。

「おじいちゃま！！ 全く幾らママと結婚したパパのお父さんがおばあちゃんの事で争っていたからって．．．！！！」

サクラが少し半泣きになりながら、自分の祖父に抗議して来る。

少しばかりやり過ぎたようだな．．．。

そう呟く老人に老女は、フフフあなたは、いつでも私のことになる
と見境ないんですから．．．と嗜めている。

サクラは、婚約者の手を握りながら祖父母達の顔を見るとにつこりと微笑んだ。

孫のサクラが微笑んでまで聞きたい事など、碌な事など無かったが、
2人はそのまま黙ってサクラの言う事に耳を傾ける事にした。

「2人は、どうやって知り合ったの？ ママ達に聞いても『さあね。オバアちゃん達に聞いてちょうだい』ってしか言わないのよ」

2人は、目を合わせるとにつこりと微笑んだ。

この家にある古いビデオカメラとテープを書斎の奥の引き出しから取り出して来た老人に、妻は呆れた様に手を口に当てて笑っている。

「お前達も、見たいだろう。おばあさんの演技を．．．」

「あなた．．．」

「もう、良いだろう。サクラもプロポーズを受ける年頃になったんだ。君の事情も分かってくれるよ」

「え？おばあちゃんも、スケートやってたの？」

サクラは、驚いた様に目を大きくさせた。

「ええ。ほんの少しね」

悪戯っ子の様な微笑みをしてくる祖母は、頬を紅潮させた。
漸く回線を繋げた夫は、テレビ画面に映し出される若き日の自分の妻の姿に目を細めた。

《さあー今大会、最後の走者です。フランス代表 美月 甲斐選手》

会場で撮ったのだらうアナウンスがフランス語と英語でされている。くるみ割り人形の曲に合わせて、黒髪の少女がぎこちなく動き出す。まるで本当の人形みたいだ。妖精の魔法で、人形は自由に踊り出すと共にその喜びをストリートラインステップでリンクの端まで行く。と其処で、いきなりダブルアクセルを飛んだ。

クワトロジャンプ

今で言うような、四回転の特技は出なかったが、画面の中の少女は、まるでスケートの本のように規則正しいステップと体に無理が来ない姿勢でのジャンプをしていた。

その上、彼女の表現力に観客達も笑いや拍手を送っていた。

リンクの中央でビルマンスピンを決めると、少女は四方の観客達に膝を曲げてお辞儀をしていた。

「お、おばあちゃん?! ！ これって幾つの時の？」

「10か、11かしらね？ あなた」

「そうだね。この後君は、すぐにスペインに引越しちゃったからね」

そう言って微笑んでいる2人を見て、サクラは驚いていた。
誰も、おばあちゃんが昔フィギアスケートをやっていたなんて教えてくれなかったからだ。

そう言えば、一度だけサクラが初めて出場する大会に、彼女の祖母が会場入りした時は、周りの選手は愚か、記者達も2人の姿に驚き回りを取り囲んでいた。

あの時から、おばあちゃん達は、一般の人とは違う世界の人だったんだと気が付いたが、まさか本当にスケーターだったなんて．．．

「おばあちゃん．．．どうしてスケートを止めたの？」

老女は、少し笑顔を曇らせると窓の外に降り積もる雪を見つめていた。

ガラスの靴（後書き）

無謀にも新しいお話を書き始めました。ストックがあるので多分年内？には終盤となってしまう可能性も高いですが、年を跨いでしまう可能性が高いと思います。
何じゃそりゃ・・・ですよね。

魔法の始まり

「こんかいは だいじょうぶ・・・こんかいは だいじょうぶ・・・
こんかいは・・・」

隣の部屋で何度も声を出して自分を落ち着かせようとしている少女がいた。

ここは、アメリカカルフォルニアにあるカトリックの教会が運営している孤児院である。

今、ここに居るのは美月と言う名の3才の少女だった。

長い黒髪は、少女の性格を表すかのように真直ぐに伸びていた。

前髪は、形の良い眉の上で揃えて切られている。

少女は、立ち上がると年配のシスターに手を引かれて、面会室と言われる部屋へと連れて行かれた。

今日は、もしかしたら自分を引き取りたいと言ってくれる人がいるかもしれない・・・。

そんな淡い期待を胸に、少女は一冊の絵本を腕に抱き締めたまま。冷たい灰色の打ちっぱなしのコンクリートの廊下を不安げな顔で歩いてく。

そんな少女の気持ちを知ってか、年配のシスターは「大丈夫ですよ。神様の御心に従えば、きっと美月を引き取って下さる方も現れますよ」その言葉をかけると微笑んだ。

美月と呼ばれた少女は、コクリと頷くと、焦げ茶色の大きなアーチ型の観音扉に拳をやりと、大きく息を吸った。

コンコン

まるで彼女の不安を表すかのように、震えるようなノックの音が響く。

「お入りなさい」

神父様の優しい声に、年配のシスターは美月のために扉を開けてやると、神父室の中に神父様の他に若い夫婦が寄り添う様に座ってこちらを見ていた。

「し、しつれいします」

少女が、辿々しく言葉を選びながら言うと夫婦は、お互いを見合つて笑顔で何かを合図した。

この人達は、この所自分に会いによくこの孤児院に来てくれている。初めは、色々な遊びを夫婦から教えてもらった。縄跳びや隠れんぼ、それに一番好きなのは彼らと初めて孤児院の外で会った時に、見に連れて行ってもらった、スタードリムのアイススケートショーだった。

何度かテレビでは見た事があるが、実際に生で見るのとは大違いだ。

キラキラと輝く様に銀盤の上を滑り出す妖精達スケーターを見て、美月は歓声を上げた。

「すごい！！ わたしもあんなふうにすべりたい！！」

そんな言葉を聞いた夫婦はお互いを見つめると目配せをしていた。その日を境に、美月はその夫婦とよく面会をするようになっていた。今日でこの面会も、もう一ヶ月経った。

神父様は、美月を見ると手で招き寄せ、彼らを美月に紹介した。

「美月。こちらは、甲斐 弘樹さんと甲斐 真奈美さんです。美月とも何度もお会いしているから、もう知っているでしょう」

神父様に優しくそう言われ、美月はコクンと頷いた。
神父様は、美月の小さな頭に大きな手を乗せると優しく撫でた。

「この人達が、美月の新しいパパとママになる人ですよ。神様が美月に最良のご両親を引き合わせる様にあなたの誕生日にプレゼントをしてくださったのでしよう。良かったですね美月」

優しく微笑む神父様の目尻には、少し涙が見えた。

美月は、自分の実の母親がどんな人かも知らない。ただ知っているのは自分がこの孤児院の前に捨てられていたと言う事だけだった。
今から三年前のクリスマスの夜の事だった。

クリスマスミサを終えた神父は、戸締まりをしに教会の扉を閉めに行く、扉の前に竹箆が置いてあった。

その中には、毛布に包まれた乳飲み子がすやすやと眠っていた。
哀しそうな表情をした神父は、その竹箆から乳飲み子を抱き抱えると、ハラリと一枚のメモが地面に落ちた。

其処には「事情があり、この子を育てる事が出来ません。この子の名は美月。美しい月が出た晩に生まれたのでそう付けました」そう書かれていたメモが入っていた。

神父は、この孤児院のかかりつけの医師に美月を診せると、医師は「この子は生後一ヶ月と言った所でしょう。私の方から出生届を制作して置きましょう」と告げると、美月の誕生日の欄に11/23日と書き込んだ。

確かにこの年の11/23には、24年に一度と言われる程の美しい満月が出て話題になっていた。

それ以来、美月はこの孤児院で暮らしている。

この日は、丁度美月が生まれて三年目の感謝祭の日だった。

神父は、美月がこの夫婦に引き取られて行くのを手を振りながら、美月を乗せた車が見えなくなるまでずっと手を振り続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238z/>

ガラスの靴

2011年12月24日02時56分発行